

News Letter

ニューズレター

No.
14

2025年11月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ／広島大学大学院 人間社会科学研究科 教職開発専攻 (教職大学院) 広報担当:伊藤 優
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7166 e-mail:yitou@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/letter.html



修了生と院生のグループ交流の様子

院生は、今年度の入学生が10期生となります。そのような節目の年となる今年も、つばさの会を開催することができました。

第一部では、3人の修了生と院生1人による実践発表、及び大学院の教員によるフォローアップが行われました。修了生や院生からは、公立学校・私立学校の働き方の違いや、生徒指導・教育相談・探究学習などをテーマに発表が行われました。各発表者の実践経験にもとづく発表を通して、現場での具体的な工夫や課題への向き合い方を知ることができ、修了生・院生ともに新しい学びを得ることができました。また、教職大学院修了後、大学院博士課程に進学した修了生からは、自身の経験を通して見た教職大学院について発表があり、修了生と院生双方にとって教職大学院の意義や可能性を改めて考える契機となりました。教員によるフォローアップでは、専攻長の大後戸一樹先生から修了生と院生に激励がありました。

第二部のラウンドテーブルでは、入学年度と担当教科が可能な限り混在した編成のグループで、修了生と院生が交流を行いました。院生にとつては、先輩方から現場での経験や学びを直接伺うことのできる大変貴重で充実した時間となりました。



最後に全体で撮影した集合写真

教職大学院教育実践開発コースに在籍する大学院生と、
教育現場で活躍する修了生が交流する同窓会「つばさの会」が
2025年8月16日(土)に開催されました

つばさの会



執筆 原田 真紘

(教育実践開発コース2年)

高木 温

(教育実践開発コース1年)

さらにその後は教室を移動し、茶話会を行いました。立食形式で行われ、立場を問わず自由に交流する姿が見られました。最後は在学生に現状復帰をお願いしていましたが、修了生の方々も協力くださり、終始温かく和やかな雰囲気となりました。

多くの方々に支えられながら、本年度も無事つばさの会を開催することができました。今回参加できなかった方々もぜひ来年以降ご参加いただけたらと思います。

授業紹介

『通教科的能力育成の授業開発と実践』

担当 寺内 大輔先生・松本 仁志先生・永田 忠道先生・
池田 史志先生・伊藤 優先生・雲財 寛先生・又野 陽子先生

授業では、まず各教科の枠をこえて育成される能力(通教科的能力)について、教科ごとに育成される能力との比較などを通して検討します。続いて、履修生一人ひとりが、通教科的能力を育成するための授業を開発します。

私は、高等学校の生徒を対象とした授業開発に取り組みました。生物について学ぶ過程で、地理・歴史の知識を活用したり、造形的な見方・考え方を働かせたりする場面を取り入れることによって、多様な能力が相互に往還する授業を開発したいと考えました。模擬授業では、地図を読み取る力や歴史をもとに考える力を活用する場面や、生物で学んだ内容を生徒役の院生一人ひとりが絵に表す活動を設定しました。

この授業で印象的だったことは、他の受講者と「通教科的能力とは」「この活動で通教科的能力を育成できるだろうか」といった問いを議論したこと。単に他の教科の知識や技能を取り入れるだけでなく、人が生涯を通して自らの能力をどのように活用していくのかを考えることの重要性に気づかされました。

教科の枠をこえた資質能力である通教科的能力について学び、考えることは、私にとって新鮮で、授業づくりにおいて欠かせない視点を獲得することができました。

執筆 澤田 友穂 (教育実践開発コース2年)

『ユニバーサルマインドの授業開発』

担当 池田 史志先生・伊藤 優先生・寺内 大輔先生・雲財 寛先生・
松本 仁志先生

「ユニバーサルマインド」とは、共生社会やインクルーシブ教育、多様性(ダイバーシティ)といった複数の概念を掛け合わせた言葉です。本授業では、多様なニーズを持つ子どもたち一人ひとりとつて、豊かな学びを実現するための姿勢や態度を育む授業づくりの開発・検討・実践を行います。オムニバス形式での開講のため、図画工作や国語など複数の教科を通して、各分野における教育理論や実践の在り方を多角的に学ぶことができます。

受講者は、どの教科・領域にも共通する見方・考え方や具体的な実践方法を学ぶ中で、自らの専門外の教科に触れながら、それらの学びを自身の専門領域にどのように応用できるかを常に意識して学びます。また、他の受講者やグループワークでの協働的な学びを通して、多様な価値観や教育観に出会い、柔軟な発想で授業を構想する力を養います。

さらに、実践の場面では、各自がアクションリサーチ実地研究や現場で行った授業を題材に試行・改善を重ね、模擬授業の実践・発表を行います。これにより、教職大学院の大きな特徴である「理論と実践の往還」を体現し、自らの授業力や教育実践力の向上につなげることができます。

子ども一人一人の学びを尊重し、個別最適な学びの実現に向けた授業づくりをめざす上で欠かせない視点を身につけることができる講義です。多様な子どもたちの実態やニーズに応じた授業を実践したいと考える方に、ぜひおすすめしたい授業です。

執筆 平川 瑞希 (教育実践開発コース1年)

「熟議を通して現代社会に向き合う歴史授業の開発と検証—公共圏の形成を目指して—」

舟津 実緒 (教育実践開発コース2年)

選挙権年齢の引き下げにより、主権者の育成が求められています。社会科・地歴公民科では民主主義の担い手となる市民の育成が目標とされてきましたが、知識偏重型の学習によりその目標は形骸化しており、とりわけ歴史は暗記科目との印象が根強くあります。そこで私は、①主権者の育成②「歴史＝暗記科目」の払拭の2点に着目して研究を行っています。昨年度は①を重視し、アクションリサーチ実地研究Ⅰ・Ⅱでは模擬裁判や模擬選挙の実践を行いました。今年度は、昨年度の成果・課題を基に②に取り組んでいます。アクションリサーチ実地研究Ⅲでは歴史事象が現代にもたらす影響について他者と熟議する授業を実践しました。歴史の授業で教室に公共圏を創出し、多角的・多面的に考察できる人を育成することは、歴史を活用して思考する力が養われ、主権者の育成にもつながります。歴史を暗記ではなく、獲得した知識を活用することで、子どもが学習の意義を実感できる授業を目指しています。

私の研究

院生の研究内容をご紹介します！

「主題観に基づく「道徳科発問構想シート」の開発—準備と対応を助けるために—」

安田 光伯 (教育実践開発コース2年)

これまで現場で道徳科の授業を考える際、どのような発問が効果的か悩む場面が多くありました。また、現場の教員へのインタビューを通してこの困り感を抱いている人が多いことも分かりました。さらに、児童生徒の想定外の反応に対してどう対応して良いか分からないという現場の教員の困り感にも触れてきました。これらの困り感に対応するためには、授業者自身の主題観を深め明確にしていくことが欠かせません。主題観を深めて明確にしてこそ発問の考案、取捨選択をすることができ、児童生徒の反応にも意図をもって対応することができます。しかし、教材研究にかけられることができる時間には限りがあります。そこで日常的に気軽に使い、しかも主題観を深めて明確にするとともに、発問の考案や児童生徒への対応の助けになる「道徳科発問構想シート」の開発に取り組んでいます。シートの中身については理論に基づくだけでなく、実際に使用した現場の教員へのインタビュー結果を反映しながら修正改善を繰り返しています。

ご指導いただいている先生方の教育・研究より

先生のおすすめの1冊

星の王子さまが教える、 変わりゆく子どもの大切なものを 理解しようとし続ける教師の姿

戸高 真也 先生

とだか しんや

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野：生徒指導、学級経営方法論、教育実践学



戸高真也先生は昨年までSCHOOL "S" で勤務をされたり、不登校SSR推進校への支援をされたりしていました。今年度より広島大学に着任され、生徒指導や学級経営について指導をしておられます。

今回おすすめいただいた本は、『星の王子様』（サン＝テグジュペリ 新潮文庫 1943）です。戸高先生が「星の王子様」を推奨される理由は、子どもの視点と大人の視点が入り交じっている点にあるそうです。戸高先生が作中の言葉で大切にされているのは「大人は、一番大切なことは何も聞かない。」という言葉です。現場を経験すればするほど、子どもに語らせずに、大人の思いが先行してしまうことがあるかもしれません。教職を志す一人ひとりが胸に刻むべき言葉ではないでしょうか。

「大切なことは変わっていく」と戸高先生は話されます。目には見えない部分にある大切なもの。日々刻々と変わっていく子どもたちの大切なものを理解しようとする姿勢が教師には必要であると気づかれます。

この本を読み終えた後、戸高先生は目の前の子どもが聞いてほしいことは何だろうと考えるようになったそうです。誰かのことを思うきっかけになる本。それが戸高先生にとっては「星の王子様」だったそうです。

最後に戸高先生から、教員になる皆さんにメッセージがあります。「一番大切なことは、目に見えない。大切なものはすぐ見つかるものではない。育てていくもの。最後にクラス全員が笑っていられるように。大切なものを見つけて、育んでいきましょう。」



『星の王子様』
(サン＝テグジュペリ 新潮文庫 1943)

執筆
山口 紅末
(教育実践開発コース2年)

渡邊 翠大
(教育実践開発コース1年)

「科学とは何か」という 根源的な問いを整理してくれる一冊 科学に関わる全ての人にお勧めしたい本です

雲財 寛 先生

うんざい ひろし

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野：理科教育、STEM教育

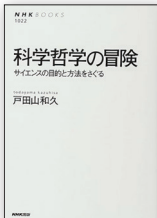


雲財寛先生は、広島大学で博士課程を修了し、他の大学で勤務されたのちに、今年度広島大学に戻って来られました。理科教育を専門に研究されています。

今回おすすめくださったのは、『科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる』（戸山和久 NHK出版 2005）です。雲財先生が大学3年生の時に研究室の先輩から紹介され、「科学とは何か」という根源的な問いを整理してくれた、と語る本。今でも論文の参考文献として引用することがあるという雲財先生にとって大切な一冊です。

雲財先生が高校生の頃、物理の授業で教わった「近似」の概念に対し、「現実の現象を捉えられていないのでは？」と感じた素朴な疑問。この本は、その疑念を解消し、科学の捉え方を変えたそうです。特に、作中で紹介される「科学理論の意味論的捉え方」について、雲財先生は次のように説明してくださいました。「科学者は、現実世界の対象をうまく説明するモデルを構築している——この視点こそが、科学を深く理解する鍵となります。」

理科教育の研究者である雲財先生が「この本を通じて「科学」の認識が整理された」とおっしゃる本書は、科学に関わる全ての方に読んでいただきたい一冊です。



『科学哲学の冒険 サイエンスの目的と方法をさぐる』
(戸山和久 NHK出版 2005)

執筆
奥井 大貴
(教育実践開発コース2年)

中村 拓哉
(教育実践開発コース1年)

教師視点から考える「10代の君たちへ」 子どもの声なき声を聴き、 心の奥底に気付ける教師へ

藤田 典生 先生

ふじた のりお

大学院人間社会科学部研究科 准教授
専門分野：地域教育経営論、教員研修

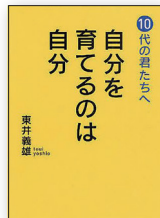


藤田典生先生が紹介してくださったのは、教育者・東井義雄による『10代の君たちへ 自分を育てるのは自分』（東井義雄 致知出版社 2011）という一冊です。この本は、自分の人生を自ら育てる責任とその尊さについて語られており、私たちの生き方の根源に気づきを与えてくれます。

藤田先生がこの本を推薦された理由は、子どもが自らの人生を切り拓いていけるよう、教師として子どもたちに寄り添う姿勢を学ぶことができるだけでなく、教師が伴走者としてどうあるべきかを考えるきっかけにもなるからだと言われました。また、本書は著者の講演を対話形式でまとめた構成となっており、読みやすさも魅力のひとつです。

藤田先生は、教師としての資質を身につけるには、長期的に子どもたちと関わりながら共に学び続けることが重要だと述べられました。子どもの声なき声や心の奥深くにある思いに気づき、良いところも悪いところもすべて含めて「見ようとする」姿勢が、信頼関係の構築につながると強調されています。

教職大学院の院生に向けて、藤田先生は「教師という仕事は確かに大変だけれど、子どもの成長や努力に直接関わることができる、非常にやりがいのある職業です。子どもに寄り添いながら、共に成長していく教師を目指して頑張ってください」と力強いメッセージをくださいました。



『10代の君たちへ 自分を育てるのは自分』
(東井義雄 致知出版社 2011)

執筆
高田 慶人
(教育実践開発コース2年)

堀 未奈
(学校マネジメントコース1年)

編集後記／第14号

広島大学教職大学院ニュースレター第14号をご覧いただき、ありがとうございます。今号から、私たち1年生が中心となり編集を担当しています。至らぬ点もあるかと思いますが、少しでも皆さまに喜んでいただける内容をお届けできれば幸いです。季節の変わり目ですので、どうぞご自愛ください。次号もお楽しみに!!

担当／神田 真帆
(教育実践開発コース1年)